

金曜コラム -**【記者会見】ソウル体高教師キム OO 性暴行事件の再告訴状提出**

- 今回の金曜コラムは 4 月 22 日、ソウル東部地方検察庁前で開かれたソウル体高教師キム OO 性暴行事件の再告訴状提出記者会見資料に換えます。

2019 年 4 月 22 日（月）午前 11 時、ソウル東部地方検察庁前では、<ソウル体校教師キム OO 性暴行事件の再告訴状提出記者会見>が開かれました。記者会見は、文化連帯、民弁女性人権委、売春問題解決のための全国連帯、全国学校非正規職労働組合学校運動の指導者と、若いスケート人連帯、体育市民連帯、体操協会役員キム OO 性暴力事件共同対策委、韓国労総女性本部、韓国女性団体連合、韓国女性の電話、韓国女性民友会などの市民社会団体が参加している「スポーツ界性暴行、暴力根絶のための共同対策委員会」の主催で開かれました。

記者会見は、現ソウル体育高校の教師であり、ソウル体操協会会長そして元体操協会専務理事である加害者について、正義にのっとった法的処罰を望むという内容で進められました。1 次告訴に対する検察の不起訴処分の問題点と再告訴の主な内容の確認、被害者連帯のために集まった市民社会団体の発言などがありました。

*注 過去の事件の経過

- 2016 年、大韓体育会のキム OO について体操協会副会長承認拒否処分があり、これに対して金 OO が大韓体育会を相手に承認拒否取消訴訟を提起
- 2017 年 5 月 10 日、被害者の刑事告訴（強姦未遂など、以下「1 次告訴」）
- 2017 年 11 月 30 日、ソウル中央地検で強姦未遂などの事件について「公訴権なし、及び嫌疑なし」処分
- 2018 年 12 月 28 日、承認拒否取消訴訟原告キム OO 敗訴確定（最高裁上告棄却）
- 2019 年 2 月 22 日、国家人権委員会の決定;被害者への人権侵害があることを確認して捜査検査に対する書面警告などを決定
- 2019 年 4 月 22 日、ソウル東部地検に金 OO について常習強姦未遂、常習強制わいせつで再告訴

まず、再告訴状を作成したシン・ユンギョン弁護士の発言要旨です。

1. 1 次告訴当時の捜査の過程で、原告は捜査機関から性暴力被害を再現するように要求を受けるなど、人格権侵害で違法捜査を受けており、これは国家人権委員会の決定で確認された。
2. 関連民事事件で被告人の「恋人だった」という主張を虚偽と判断して、原告であった被告人が敗訴した。
3. 1 次告訴当時、原告は常習的に性暴行被害を受けたことを示したが、これについては全く捜査されていない点などを総合して、再告訴を決定。
4. 強制わいせつなど性犯罪に対しては、2013 年 6 月 19 日に親告罪規定が廃止され、それ以前に発生した犯罪については当時、1 年以内に告訴をしないと処罰が不可能だったが、刑法に規定された常習強姦未

遂などに対してはその以前でも親告罪ではなかったのに、1次告訴当時も処罰が可能だったが、1次告訴当時、検察は常習の規定を適用しておらず常習犯罪事実についても捜査していなかった。

5. これに1次告訴当時に捜査されなかったいくつかの犯罪事実を追加して常習強姦未遂などで加害者を再告訴した。

6. 性暴行被害者の場合には、この事件のように違法的捜査が行われると供述するのが非常に難しくなるが、1次告訴当時、検察は被害者が最初から被害事実のすべてを言わなかった点などを聞いて嫌疑なしの処分をした。

7. 今回の再告訴は被害者の人権を侵害する違法捜査の問題提起であり、法律を適用して犯罪を明らかにすべき検察の捜査権と起訴権に対する問題提起でもある。

被害者連帯のために集まった市民社会団体を代表しては、「韓国女性の電話」付設女性の人権相談所チェ・ソンヘ所長、文化連帯のハム・ウンジュ執行委員、韓国女性人権振興院のイ・ミラ先生が発言しました。

文化連帯ハム・ウンジュ執行委員の記者会見発言内容

ソウル体高教師キム OO 性暴行事件に関連して、国民の常識レベルで同意することができる公正な捜査と厳重な処罰が行われることを要求します。安全で幸福に、そして公平にスポーツが行えるように教育しなければならぬ現場の指導者であり教師、そして協会の役員によって不当な性暴行が行われました。そして、これは公平に処理されていません。これはオリンピックを二回開催しワールドカップを開催したスポーツ大国の背後にある恥かしい姿です。当然、このような事件は公正に捜査され処理されるべきです。

去る1月、趙ジェボム性暴行事件に関連して大統領も「可能な限り徹底的に調査し、捜査して厳重な処罰が行われるべきだ」と発言しています。特に過去、1次告訴と捜査過程で被害者は不当に人権侵害に遭いこれにより司法機関への信頼を失った状態です。今回こそは正当で正義の捜査が行われることを願い、その過程でどのような人権侵害も無くさなければならぬことを強調します。

最後に、体操界とスポーツ界に働きかけます。性暴力事件と関連した意見において中立というのはありません。そして沈黙することにより加害者に同調することは無くさなければなりません。黙っている事でスポーツをする将来の世代に性暴力のリスクと不安を押し付けないでください。被害者が闘士になって一人で戦うようにはできません。私たちが引き続き声を出している理由です。皆が衆知を集め沈黙のカルテルを破ってくれることを促します。

・ 記者会見の参加者 ・

司会：ジョン・ヨン Chol (体育市民連帯執行委員、文化連帯共同執行委員長)

参加者：シン・ユンギョン (弁護士)、オ・ソンヒ (弁護士)、ハム・ウンジュ (文化連帯)、チェ・ジュンヨン (文化連帯)、イ・ギョンリョル (体育市民連帯)、イ・ヒョウオン (韓国労総)、金スヒ (韓国女性団体連合)、イ・ミラ (韓国女性人権振興院)、チャン・ドクソン (若いスケート人連帯)、チェ・ソンヘ (韓国女性の電話) など

01 連合ニュース 2019. 4. 24

【 文体部スポーツ革新委委員、鎮川選手村の現場訪問 】

文化体育観光部スポーツ革新委員会（委員長ムン・ギョンナン）委員が、忠清北道鎮川の国家代表選手村を訪問し体育の現場を確認しました。

ムン・ギョングンスポーツ革新委員長とスポーツ先進化・文化分科委員は 24 日鎮川選手村を訪れ、大韓体育会関係者から国家代表トレーニング支援システムと選手村運営現況の説明を聞きました。また、シン・チョン村長の案内で体力訓練場と選手村 CM 病院、選手の人権相談室など施設を見学しました。

これは体育の現場を直接見て、選手たちの人権が保障される基盤の上で競技力を高める改革案を見つけるための歩みです。去る 2 月、体育分野の構造改革の課題を発掘するために発足した革新委はスポーツ人権、学校スポーツ正常化、スポーツ先進化・文化など 3 つの分科委で構成して活動を行っています。

このうちスポーツ先進化・文化分科委は、国家代表選手たちが人権の保障を受けながらも、国際舞台で国家ブランド価値を高めることができようにする改革案を探しています。先にスポーツ革新委は 17 日には市道体育奨学官懇談会を開き、現場の意見を収めました。革新委は今後、より多くの体育現場を訪問し、利害関係者の意見を聞いて臨場感のあるスポーツ界の構造革新勧告を用意する予定です。

出所

<https://www.yna.co.kr/view/AKR20190424037600007?input=1195m>

02 スポーツ韓国 2019. 4. 24

【 試合が終わった後、子供たちは「罪人のように」立っていた 】

小学校リーグが真っ盛りの仁川のサッカー場。上は 13 歳の子供が磨き上げた実力を競い合っていた中で、突然かんしゃく交じりの叫びが競技場に響きました。ベンチで選手を見守っていた、あるコーチングスタッフの怒鳴り声でした。

試合が終わった後に子供が頭を下げたまま丸く集まりました。子供たちに何か話をするコーチングスタッフの姿勢は誰が見ても高圧的でした。まだ幼い子供たちにはその雰囲気だけでも十分に恐怖を感じるほどの状況でした。ただサッカーを楽しみたかった子供たちは、試合が終わった後にはまるで「罪人」にでもなったような様子でした。さらにあと味が悪かったのは、単に一つや二つのチームだけの話ではないことでした。

【涙を流した子供でさえも、慰め代わりに「水筒で指差し」】

一週間待ちに待った試合の日。競技の準備をするチームの雰囲気は、それでいつもときめきを感じられます。早く走りたい気持ちが表情などにそのまま現れます。小学校リーグを駆けずり回る子供たちはそれほど幼いだけの選手たちです。

ところが、このような雰囲気はほとんど試合開始前にのみ有効です。試合中ミスをしたとか、失点を許したまま負けているハーフタイム、そしてチームが負けでもした場合、子供たちはコーチングスタッフの前で、それこそ「罪人」になります。

敗北が悔しくて涙を流すか、残念さ隠せないレベルではありません。選手たちはほとんど後ろ手にして監督を中心に丸く集まるが、頭をすっぽり下げた選手たちも非常に簡単に見つけることができます。そして

子供の前では監督とコーチの姿勢は決して子供たちに接する雰囲気ではありません。

ポケットに手を差し込んだり腕を組んだりしたまま、険悪な表情を作るのが常です。頭を下げたまま後ろ手にしている子供たちの姿勢と合わせると眉をひそめる雰囲気です。水筒で選手たちを神経質に指したり、主将の腕章を無理やり奪ったりするなどの姿も目立ちました。

皆の前で恥を与える監督もいました。他の選手たちが座って荷物を取りまとめる間、当該監督は何人かの選手だけ呼び立てた後、個人指導をしました。個人指導という名の下に、事実上皆の前で「こらしめ」という状況。友人や家族の前で一人立っている子供は、ただ不動の姿勢で頭を下げているしかありませんでした。

また、他のチームの主将は試合を終えた直後に涙をこぼしました。しかし、その子は慰めを受けませんでした。コーチングスタッフはしばらくの間、選手たちに話しました。何人かの選手を水筒で指し神経質な反応でした。泣く選手を慰めたのは横に立っていた友人だけでした。

【終始続くベンチの指示、役にたたない規定】

試合が終わった後だけの問題ではありません。試合中、子供たちはベンチに座ったコーチングスタッフから絶えず指示を受け、叱られなければなりませんでした。11対11から8対8に、競技場を駆け回る選手が少し減っただけで、小学校リーグを駆け回る選手はまだ考えるサッカーをすることが困難でした。

今年小学校リーグは8人制が導入されました。チームの戦術よりも、より頻繁にボールに触って成長しなければならない時期との判断から来ました。ミハエル・ミュラー大韓サッカー協会技術発展委員長も「初等部の選手たちはチームの戦術を通じた完璧な競技運営は重要ではありません。個人的な技術など選手の個人の発展を段階的に習得して学ばなければならない」と言いました。

そのため、新しい規定が加わりました。選手たちがさまざまな状況で自分で判断し、意志を決定できる能力を向上させるために、コーチングスタッフの無分別な試合中の指示を禁止することでした。指導者は、試合開始前、選手交代の際、ハーフタイム、前・後半各2分ずつ試合が中断された後、行われるコーチングタイムのみ指示が可能です。

しかし現場で見守った風景は、規定とは距離が遠いものでした。試合中、細かく選手をコントロールして、ただ「勝つために」汲々とする監督が大半でした。パスを誰に出すか、オーバーラップをするタイミングなど監督の指示は非常にきめ細かいものでした。「なぜ無駄にドリブルをするのか」などの競技中の選手を叱る声も頻繁でした。

この日感じた現場の雰囲気は、小学生の子供たちがサッカーを楽しんだり、自分で考えることができる環境とは距離がかなり遠いものでした。

【誰の、何のためのサッカーですか】

チームの選手たちは、声が大きくないことに対する監督の指摘があったのか、後ろ手のまま「はい！」の答えを数回繰り返す必要がありました。軍隊で感じるような雰囲気や文化を、上は13歳の子供たちが経験していたわけです。

現場にいたある選手の父親は「監督に怒られでもしたら子供が1日中不機嫌にしている。それでもサッカーがいいから続けたいと言います。胸が痛い。」とし「今やっと5、6年だ。プロでもなく勝ち負けの何が重要なのかよく分からない」とため息をつきました。別の父親も「見る目がないとき雰囲気が良いのか気になるのは事実」とし「いくらチームスポーツと言っても、今の年齢にフォーバックだの、スリーバック

だの、戦術が何の意味があるのか。大韓サッカー協会で規定も変えたようだが、変わった事はないと思う」と厳しい一言を加えました。

あるユースの指導者は、「以前は試合中に監督が汚い言葉を吐かなかったか。それでも今はそれ程ではない」としながらも「試合終わって罪人のように立っているのはまだ変わりありません。試合終わったらみんな後ろ手でシャキッと立っている」と言いました。それと共に彼は「先生（監督）がどのように改まるか、どのように変わるかはよく分からない」とし「それでも結局は子供たちのためにすることではないか。指導者も考えを少しそのように持ってほしい」と言いました。

「それでも」幸いなことは陰悪な雰囲気とは距離が遠いくつもの監督とチームもあった点。試合中に倒れた選手に向かって大丈夫か聞いたり、ハーフタイムや試合後の選手をまず座らせてから話をする監督もいました。

このように極めて当然の行動さえも、幸いに見えること。現場で直接感じた少年サッカーの現状でした。

*原文出所

<https://sports.v.daum.net/v/20190424070300939>

03 スポーツ韓国 2019. 4. 25

【 スポーツ界性暴力被害の半分は12歳以下のときの経験 】

スポーツ界で発生した性暴力の半分は被害者が12歳以下の子供のとき経験したという海外調査の結果が出ました。マイクハチル英国エッジヒル大学助教授は25日午後、韓国プレスセンターで韓国両性平等教育振興院の主催で開催される第16回国際シンポジウムに先立って出した発表文で、欧州7カ国の性暴力の被害者72人を対象に実施したインタビュー調査の結果を紹介しました。

ハチル教授の発題文によると、ドイツやスペインなど欧州7カ国に居住する18歳以上男女の性暴力被害者72人を対象に実施した調査では、32人（44.4%）が12歳以下の年齢時に性暴力を経験したと答えました。続いて被害年齢が13～15歳18人（25.0%）、16～18歳の10人（13.9%）、19～25歳・26歳以上の各5人（6.9%）、残りの2人は関連情報がありませんでした。

インタビューに応じた人のうち1年以上、性暴行が持続したと答えた人は50%でした。約1年が15%、6ヶ月以内が12%でした。性暴力が発生した組織や団体を問う質問（複数回答可）に「スポーツクラブ」という回答が63.0%（46人）で最も多く、続いて「寄宿舎スポーツ学校」が16.7%（12人）、「スポーツ連盟」と「オリンピックトレーニングセンター」が各6.9%（5人）、「体育教育機関」と「大学のスポーツ」は各5.6%（4人）などでした。

加害者の役割と地位には「コーチ」が77.8%（56人）で大部分を占めています。被害者がしていたスポーツ種目ではサッカーが22.2%（16人）で最も多く、体操12.5%（9人）、陸上競技8.3%（6人）などの順で把握されました。ある被害者は、ハチル教授が抜粋して紹介したインタビューで、「加害者はコーチでした。私の父と同年です。父と非常に親しい関係でした。だから私が今何かを言えば、すべてのものを台無しにし、雰囲気を壊す人になるんだなといつも思っていました」と被害当時の記憶を思い出しました。ハチル教授はスポーツ界の性暴行加害者の主な特徴として、非常に尊敬される人物、権威と優越的地位のある人、好意的で親切な友人のような人などを挙げました。ドイツなどのヨーロッパの研究者と一緒に

った今回の調査は、「真実と尊厳のための声 (Voices for truth and dignity)」と呼ばれるプロジェクトで進行されました。先の結果は、昨年5月にエッジヒル大学のホームページ等に紹介されました。ハチル助教授は「スポーツ内の性暴力の存在を認めなさい」と言い、「組織全体の対応を改善するために(被害)当事者の生きている経験の価値を認めなさい」と提言しました。

「スポーツ#ミートゥー、国際的現況と対応」というテーマで開かれたこの日の国際シンポジウムでは、スポーツ先進国とされるノルウェーがスポーツ界の性暴力を予防し防止するための努力が紹介されました。ハーバード・オブ・レ・ガードノルウェーオリンピックパラリンピック委員会上級顧問は「スポーツ内の性暴力や性的嫌がらせの予防と対策 - ノルウェー経験に基づいて」というテーマ発表文で、「ノルウェーはスポーツ内のすべての形態の差別、セクハラについて不寛容の原則を厳格に適用する」と説明しました。また「すべてのスポーツクラブは、差別やセクハラが自分の組織に発生したことがあるか、現在発生しているか、または将来に発生するかについて考えなければならない」と強調しました。

シンポジウムパネリストとして立ったハム・ウンジュ文化連帯執行委員は、討論文で「衝撃的な事件が起きても、当事者以外の人には誰も言わない。恐ろしいほど静かなスポーツ界は、「沈黙のカルテル」が形成されている」と指摘しました。続いて「国威宣揚に代弁される成果を中心のスポーツパラダイムを転換し、スポーツ文化を革新しなければならない」とし「エリート体育育成方式は必ず変わらなければならない」と促しました。

原文出所

<https://www.yna.co.kr/view/AKR20190424162000005?input=1195m>

INFOMATION

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 1485-3 スンジョンビル 305 号

체육시민연대 서울시 서초구 서초동 1485-3 승정빌딩 305 호

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net

ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳 : 佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jr1fep@gmail.com